

法政大学の記憶地図の試み

—50年目の卒業式—

法政大学 HOSEI ミュージアム 准教授 北口 由望

法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

1 問題関心

本稿は、ワークショップ形式で法政大学卒業生の学生時代の記憶を収集し、その記憶の中の大学生活を把握することを目的としている。学生時代の日常の記憶に着目した理由をはじめに説明する¹⁾。

記憶は、実証的歴史研究にとっては扱いにくい対象とされてきた。記憶は間違っただけのもの、歴史の事実として扱うには慎重に取り扱われるものと考えられてきた。記憶は、個人の物語やアイデンティティと結びついており、実験による記憶研究においても人がいかに間違えるかが分析されている。

しかし、その一方で記憶そのものを対象とした研究もある。これらの研究は、記憶を過去の事実を探るための史資料として捉えるのではなく、いかに現在に記憶されているのか、想起されるのか、要するに現在の社会を分析するという目的があった。

例えば、集合的記憶論を最初に提示したモーリス・アルヴァックスは、人々の記憶について次のように述べている。

「人が思い出すのは、自分を一つないし多くの集団の観点に身を置き、そして一つないし多くの集合的思考の流れに自分を置き直してみるという条件においてである。」(Halbwachs (1950-1989) 19頁)

一般的に記憶は、個人が保有するもの（個人的な現象）と考えられているが、記憶は他者との関係性において想起されるものであり、想起されなければ記憶として認識されない。つまり、アルヴァックスは、記憶を集合的な現象と考える分析の枠組みを生み出したのである。

では、そのような集合的記憶は、どのように残るのか。記憶の場について総合的調査プロジェクトを企画したピエール・ノラは、「集合的記憶が根付いている重要な『場 (lienx)』」(Nora (1996=2002)15頁)の重要性を指摘した。つまり、想起という行為を通じて繋がる記憶と場所の関係を「場 (place)」という視点で分析したのである。Nora (1996=2002)によれば、記憶の場とは、「物質的なものであれ、非物質的なものであれ、きわめて重要な含意を帯びた実在である。(同上18頁)」。

さらに歴史実践として、記憶の場を再発見し、場所の力 (power of place) を顕在化する地域活動に取り組んだのがドロレス・ハイデンの研究である。Hayden (1997=2002)は、集合的記憶の継承を景観 (landscape) と一緒に考えるためのワークショップや場所の力を発見するパブリックアートなどの数々の歴史実践を紹介している。Hayden (1997=2002)は、場所が身体感覚を介して記憶とつながっている意味を次のように説明している。

「研究者が、場所に過剰なほどの意味を見出すとしたら、それは、記憶の源泉としての、また記憶の糸が紡がれた織物のような存在としての場所の力が人間の五感へ働きかけているということである。(Hayden (1997=2002) 41頁)」

梅崎・岩井(2020)は、2020年2月に釜石市内で開催された「記憶の社会的チカラ―釜石におけるアートと展示イベント」の報告を行っている。釜石という場で集合的記憶を集め、様々なアート作品として展示する活動は、場所と記憶の関係、想起を生み出す表現、集合的記憶の共有や分有というテーマに対して実践を通して考察した記録である。

なお、上記の研究や実践で対象となった記憶は、公的な記録には残らない多くの記憶を含む。日常生活の中での生活の記憶は、記録されにくいものだと考えられる。それゆえ、アートイベントで記憶がテーマとなってきたのは、記憶として認識されていなかったものを顕在化させる価値があったと考えられる。サトウアヤコ氏の「日常記憶地図」の作品は、日常記憶という概念によって記録に残り難い記憶をいかに集め、それらをどのように展示するかを考えたものである(サトウ(2020)参照)。我々は、アーティストではないが、アート作品や実践を参考にしながら想起を生み出しやすい仕組みを作ろうとした。我々が企画したのは、場所と記憶の関係を地図の中に描き込んでもらうワークショップである。

大学史においても大学行政や制度や教育内容の記録は残りやすい。しかし、学生生活の記憶は残り難い。ゼミナールの活動や部活やサークル活動が何らかの成果を出せば記憶されるのだが、それらは日常的な学生生活とは違い、特別な日の出来事と言えよう。

さらに学生生活は、キャンパスという狭い空間だけに限定されない。学生街を含むキャンパス近郊もまた学生たちにとっては生活の場であり、学生生活の思い出(記憶)が残っている。そこで、キャン

パス近郊地図を使ってキャンパス近郊と記憶の関係を知るためのワークショップを計画した。本稿はその実践の記録である。

2 「学生街」とは？

実践報告を行う前に、大学生にとって「学生街」とはどのような存在であったのかについて歴史的に確認したい。特に2000年代以降、首都圏の大学がそれまで郊外に展開していたキャンパスを閉鎖または縮小して「都心回帰」の政策を進めており、「大学と地域」の在り方が転換期を迎えている。こうした状況は学生たちの日々の生活や学生文化にどのような影響をもたらすのだろうか。本節では、そうした現代的な問題に関心をもちながら、1960～70年代の学生生活・学生文化を考えるうえで欠かせない「学生街」について考えてみたい。

(1) 先行研究の紹介

「学生街」として真っ先に思い浮かべる地域は「神田」であろう。谷本芳郎「神田学生街の発生と変遷について」は「神田学生街」に関する先駆的な論考として知られる。谷本は、明治期に入り学制が整えられていく過程で、東京大学をはじめとする官立学校が神田に設置され、その周辺に私立の様々な学校が集まったことで学生街が形成されたのであり、神田学生街の充実化と学生生活が密接に結びついていたことを指摘した(谷本1983)。

松原太郎氏はこうした谷本の研究を踏まえ、明治期の神田学生街における私立法律学校の存在に着目し、「神田は学校の立地にふさわしい諸条件を兼ね備えた地域」と結論づけた(松原2016)。1980年代を「学生街に大きな変化が始まった時代」とする石川恵架氏は、80年代に神田駿河台周辺の大学に通っていた元学生や喫茶店に聞き取り調査を行い、学生街の変容を追った(石川2023)。このように、現在でも複数の学校が集まり早くから学生街が形成された神田だけでなく、大正期にはすでに、本郷＝東京大学、三田＝慶応

義塾大学、早稲田＝早稲田大学が学生街と位置付けられていた（出口 1917、瀬戸口 2024）。

歴史学的なアプローチだけでなく、近年は「まちづくり」や「都市計画」という視点からも学生街への関心が高まっている。本稿とのかかわりでいうと、学生街と称される早稲田大学早稲田・戸山キャンパスおよび日本大学駿河台キャンパスの周辺地域と、学生街と呼ばれることは稀な法政大学市ヶ谷キャンパスの周辺地域を対象にした、学生たちの日常活動の空間分布に関する調査がある。2013年に実施されたその調査により、2地域に比べ、市ヶ谷キャンパス周辺地域では「飲食」「娯楽」「購入」といった学生たちが日常活動を行う店舗・施設が少なく、学生たちの利用も限定的であることが明らかになった。とくに「娯楽」に関しては法政大学の学生たちがキャンパス周辺で利用することが極端に少なく、他の街へ移動していること、講義や自習がキャンパス内で行われていることから「教育」活動面での地域差は生じていないという分析は大変興味深い（柿畠・福井 2014）。

また、1960・70年代が学生街の発達期であるという指摘（梅岡 2008）や、「国立（くにたち）大学町」を代表するように、郊外型キャンパスが設置されることで形成された「大学町」の研究もある（木方 2010）。

（2）「学生街」を構成する要素

「学生街」が、大学のキャンパスが位置し、そこに通う学生たちが学生生活を送る地域であることは大前提としても、それだけでは学生街とはいえない。そこで、何をもって学生街と定義されるのかを考察するため、従来の研究を踏まえて、学生街を構成する要素について検討する。

学生をターゲットにした商業施設として、1960～70年代の学生街に欠かせないのは喫茶店であった。大野雅子氏はガロの「学生街の喫茶店」（1972年）を通じて、なぜ喫茶店という場所が「過去の過去性」を現出し、ノスタルジアを引き起こす装置となるのかを検証し、学生街というのは特

定の場所を指すのではなく、概念がないからこそ一般化され、そこでの思い出そのものが学生街ではないかと指摘した（大野 2018）。学生街としての早稲田境界の変遷を追った佐藤能丸氏は「サークル連絡の喫茶店」と表現し、学生街の喫茶店が課外活動と不可分であることを示唆している（佐藤 2003）。

ほかにも学生がそれぞれ最良にする食堂や居酒屋、授業の合間に訪れる映画館、麻雀屋、パチンコ屋、ゲームセンターなどの娯楽施設、販売店としては参考書や教科書を購入する書店・古書店、制服を誂える洋服店、バッジやトロフィーを製作する徽章屋が点在し、こうした店舗・施設において学生同士の接点が作り出されると考えられる。「学割」など学生向けサービスが提供され、学生のアルバイト先となり、学生と街が補い合う関係にある。地域や時代に差はあるものの、下宿やアパート、銭湯の存在も忘れてはならない。

こうして見ると、「学生街」とは学生をターゲットにした商業立地であると定義づけられる。しかしながら、商業的観点だけでなく、「都市の形成」という意味では、大学キャンパスの最寄り駅や交通網、そして駅からキャンパス、キャンパスから店舗を結ぶ通り・道路といったようなインフラ、さらにはキャンパス周辺の川や公園などの公共空間も、「学生街」を構成する要素に含み、分析を試みる必要があるだろう。

2 法政大学の歴史と今

今回の実践で対象とした、1960～70年代に法政大学で学生時代を過ごした人々がいまのキャンパスに懐かしさを抱くことは難しい。どれだけ意識して同じ場所に立っても、学生時代の記憶を想起させる校舎は存在しないのである。本節では、市ヶ谷キャンパスを軸に、記憶を想起する場が失われていく経過を確認したい。



図1：外濠にそびえたつ第一校舎（中央やや右）

（1）「坂」と「濠」の青春—市ケ谷キャンパスの開設

1880年に神田駿河台で創立された法政大学が現在の市ケ谷キャンパスに移転してきたのは1921年である。それまで法律を主とした専門学校だったところが、正式な「大学」に昇格し、このとき新築された「第一校舎」は外濠にそびえ立ち、総合大学として歩み始めた新生法政大学のシンボルとなった（図1）。関東大震災の被害をほとんど受けなかったこともあり、学生数が急増すると、学生たちは狭いキャンパスを飛び出し、目前に広がる外濠の土手に憩いの場を求めた。当時まだ、江戸城外濠は防御施設と位置付けられていたため、法政大学と地域住民の連名で東京市に要望を出し、1927年「土手公園」という名で開放された。現在の「外濠公園」である。こうして学生たちは第二のキャンパスを獲得したわけだが、この頃の学生は「神楽坂」と「外濠」は法大生の縄張りといわんばかりに、自分たちの学生生活を「坂」と「濠」の青春」と表現した。

（2）戦後復興と大学大衆化

1945年5月の空襲で、戦前に建てた校舎の大半を焼失した法政大学の戦後復興は困難を極めた。敷地を拡張して、竣工年の下2桁を校舎の名称にした「53年館（大学院棟）」、「55年館」、「58年館」を新築した（図2）。飯田橋・市ケ谷界隈では初の高層校舎である。とりわけ55・58年館はモダニズム建築を代表する校舎として知られる。教室だけでなく、学生ホールや地下食堂が設置されており、学生生活を、55・58年館とともに記憶する卒業生も多い。新見附を渡った新宿区



図2：1960年代の市ケ谷キャンパス全景 右端から53年館、55・58年館

側に新築された62年館では主に外国語の授業が行われ、休憩時間に急いで移動した経験を持つ卒業生もいるだろう。一口坂の途中に建てられた69年館には就職課が置かれた。こうして校舎が次々新築される一方、戦後民主主義の教育理念のもとで急増する学生数を収容するまでには追いつかず、「籍があっても席がない」状況が続いた。いわゆる「マスプロ教育」である。

（3）1970年代—様変わりする市ケ谷キャンパスの姿

1970年はキャンパスが様変わりした年である。キャンパス内で起きた2つの「内ゲバ」事件を受けて、学生運動の拠点となっていた六角校舎（1928年竣工）と新館（1930年竣工）が解体されただけでなく、外部からの不法な侵入者を防ぐ

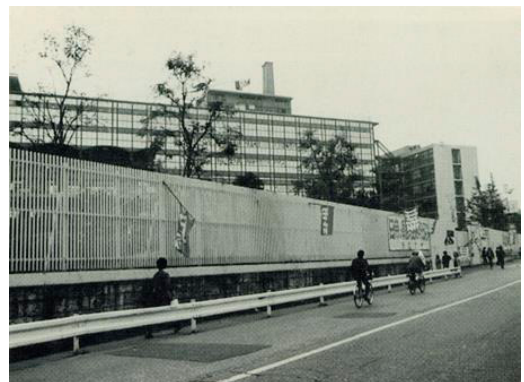


図3：キャンパスを囲む鉄柵

ため、キャンパスの周囲が4～5mの高い鉄柵で囲まれた(図3)。それまでは「低い垣があるだけで、どこからも自由に入れる開放的な雰囲気であったものが、柵で囲まれた」キャンパスに様変わりしたのである。

こうして1970年代を迎えた法政大学では学生運動が過激化するなかで、大学側がロックアウトで封鎖し、一部の学生たちがバリケードを構築する光景が日常茶飯事となった。1972年度のキャンパス案内図(図4)をみると、六角校舎の跡地に建設中の学生会館は1973年に新築され、その2年後には「東校地」の場所に現用の市ケ谷総合体育館が建てられた。

58年館脇の新しく購入した敷地に「80年館」



図4：1972年度『学生生活の案内』に掲載されたキャンパス案内図



図5：1980年代以降の市ケ谷キャンパス全景
左側に学生会館と80年館がみえる

が建てられると、地下4階から地上2階までの下層部分が図書館、上層部分が研究室や資料室に充てられ、教育・研究環境はかなりの改善をみた(図5)。しかしながら、1950年には6,000名に満たなかった学生数は1970年代に30,000名近くに膨れ上がり、市ケ谷キャンパスだけでも約25,000名の学生たちを収容していた。教室の絶対数が不足していることは明らかであったが、これ以上の施設拡充は不可能となり、郊外型キャンパスへの移転について検討が始まったのである。

「町田校地」(現在の多摩キャンパス)を本格的に開発するにあたり、全学移転か部分移転かの議論は二転三転した。最終的に、1984年開設の多摩キャンパスへ移転したのは最多の学生数を擁し、マスプロ教育の最大の被害者となった経済学部と、町田校地開発を先導した教員が所属する社会学部の2学部となった。

(4)「再開発」の時代

2学部が転出した市ケ谷キャンパスにおいて始動したのが「市ケ谷再開発」であった。キャンパスを囲っていた鉄柵を1992年に撤去し、代わって低い垣根に沿って木々が植樹されたことはキャンパスのイメージを刷新した。53年館の跡地に建てられたのがボアソナード・タワー(2000年)である。1973年竣工の学生会館は2005年に解体され、戦前を知る唯一の第一校舎(旧図書館)は外濠校舎竣工にともない、2007年に解体された。62年館は隣接する通教館とともにリノベーションされ、2007年にデザイン工学部専用の田町校舎として生まれ変わった。その間、キャンパスに隣接していた嘉悦女子中・高等学校が転出し、同校が使用していた校舎は「法政大学富士見坂校舎」として活用されることとなった。

55・58年館建替工事に伴い、正門脇に富士見ゲート棟(2016年)が建てられた。戦後の法政大学を半世紀以上にわたり見つめ続けた55・58年館の解体を惜しむ、お別れイベント「55・58 フェアウェル Days～55・58年館の〈最終講義〉」に、2日間で約2,800人もの来場者があったことは卒

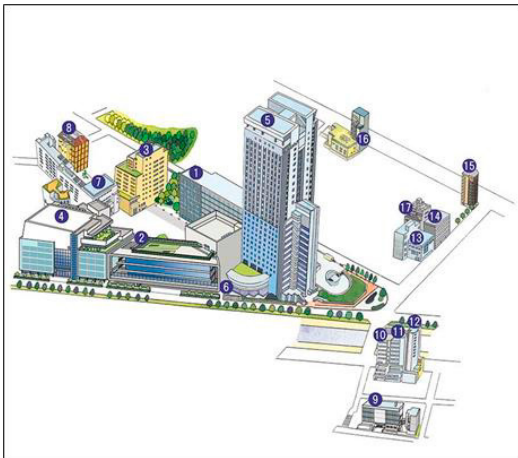


図6：再開発を終えた市ヶ谷キャンパス（大学HPより）

業生や教職員たちの愛着の度合いを示す。

2019年3月の大内山校舎の竣工とその後の中央広場の完成を以て「市ヶ谷再開発」はフィナーレを迎えたわけだが、こうしてみると、1990年代以降、校舎の解体・改装・新築が繰り返され、常に工事中の記憶を持つ卒業生も多いだろう（図6）。

こうした状況は市ヶ谷キャンパスだけではなく、理工系専用キャンパスとして1964年に開設され、当時の工学部建築学科の教員たちによる協同設計で機能的な校舎が建てられた小金井キャンパスも同じである。1990年代から2010年代にかけて「再開発」が進められ、かつての校舎はすべて姿を消した。さらに2024年4月、大学創立150周年にあたる2030年を目途に、経済学部を多摩キャンパスから市ヶ谷キャンパスに移転させることが発表され、新たな「キャンパス再構築」が展開されようとしている。

4 記憶地図の実践

（1）記憶地図作成の進め方—想起を促す仕組み

いまのキャンパスが自身の学生時代の記憶を想起する場とならない場合、つまり自分たちが学生時代を過ごした「懐かしい」校舎がない場合、ど

のようにして卒業生たちの記憶を呼び起こすことができるだろうか。

記憶地図の話題に入る前に、この実践の契機となった HOSEI ミュージアムの企画展示を紹介したい。HOSEI ミュージアムでは2024年3月に映像シリーズ「法政大学の歴史・個性・文化」のVol.5「大学への「問い」／学生との「対話」—中村哲総長と法政大学の15年—」を公開した。これは1968から1983年に総長を務めた中村哲の時代をまとめたもので、2024年度春学期の企画展示はこの映像に連動する内容であった²⁾。

展示期間中、A6サイズの情報カードを置き、中村哲総長の在任中に学生時代を過ごした卒業生に授業やサークル活動など自身の学生生活の記憶を自由に記入いただいた。この試みの背景には、ミュージアムに来館する卒業生の多くが1960年代から80年代の卒業生であることと、学生運動真っ盛りの学生生活を懐かしそうに語る日常があった。展示会場には、記憶を想起する仕掛けとして当時のキャンパス全景を大型パネルにして掲示し、呼び水となるよう常に数枚のカードを掲示していたが、来館者がその場で「語る」ことはあっても、自発的に「書く」という行動に結びつくことは多くなかった。それでも、合計61枚のカードが集まり、本人から許可を得たものは順次、展示会場に掲示した（図7）。

ミュージアムでは、この企画展示を観覧した本学の卒業生・後援会連携室から、「法政フェア」の一環として開催する「卒業50年記念行事」で

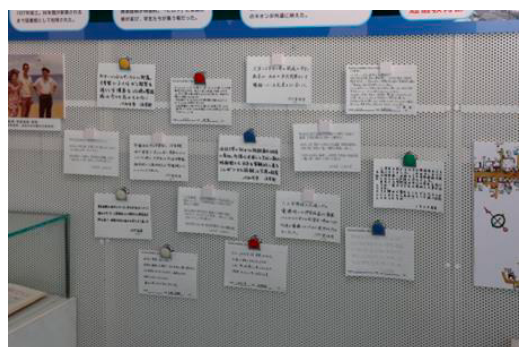


図7：記憶カードの展示

の出張展示と関連講演の依頼を受けた。かつては卒業50年目を迎えた卒業生を一齐に入学式に招待していたが、コロナ禍による一時中止を挟み、2023年度より、例年9月に開催される「法政フェア」にあわせて招待する企画である。50年前の卒業というと、企画展示で取り上げた1973年度卒業生が対象となる。北口が同時期に学生時代を過ごした人々が一堂に会す貴重な機会と捉え、企画展示での試みと同様に、記憶カードに記入してもらおうと準備を進めていた。その準備の中で、大学史委員会が取り組む150年史事業で学生生活プロジェクトを担当する梅崎のサジェスチョンで、卒業生にとって今のキャンパスに懐かしさを抱くことはなくとも、学生生活を送った街には思い出があるだろうからと、学生生活の記憶をキャンパス周辺の地図に書き込んでもらう企画が立ち上がった。

実践にあたってはサトウアヤコ氏の「日常記憶地図」を参考にし、可能な限り、卒業生が学生時代を過ごした時代、すなわち1973年頃の地図を用意した（サトウ2020ほか）。市ヶ谷分は、昭文社「D・Xポケット版東京区分地図」1970年、小金井分は、昭文社「小金井市街図」1973年（小金井市文化財センター提供）である。

当時の学生の大半は通学生であると想定し、市ヶ谷キャンパスでいうと、地図にはキャンパスの位置と飯田橋駅、市ヶ谷駅、九段下駅、神楽坂駅

の位置を示し、概ね4つの駅が地図の端になるように調整した。地図の範囲に市ヶ谷駐屯地を含めたのは1970年11月に三島由紀夫が割腹自殺した事件で街が騒然となった記憶を語ってくれた卒業生がいたこと、北の丸公園を含めたのは公園内の日本武道館で入学式や卒業式が開催されていることによる。

また、キャンパス周辺をどこまでを地図の範囲に含めるか検討するにあたり参考としたのが、当時の卒業アルバムに掲載されたキャンパス周辺マップであった（図8）。このマップは毎年更新されるものではないが、学生たちがキャンパス周辺でよく行く飲食店や麻雀店、映画館、書店などをイラストで表現しており、貴重な情報源となった。

ワークシートの試作段階で、卒業生・後援会連携室の職員に協力してもらい、改良を重ねた。本学の卒業生でもある職員は今回対象となる卒業生よりも20年近く後の時代であるが、今回の趣旨にあわせて、外濠公園や神楽坂飯店など、1970年代から存在していた場所や店舗を例に記入してくれた。また、職員として勤務した経験を活かして、小金井キャンパスの記入例も用意してくれた。小金井の地図に、JR東小金井駅だけでなく西武新宿線の花小金井駅を表示し、小金井公園も含めることになったのは同職員の提案による。

試作段階では駅からの通学路を記入してもらうことを想定していたが、人によってルートが大きく変わる小学校や中学校と異なり、大学の場合は使用する駅が決まればほぼルートは一つで差異は生じないという意見を受けて、取りやめた。

最終的に、卒業生にワークシートへの記入を依頼したのは下記の3点である。

- ・いつも使った駅を○で囲んでください。
- ・学生時代の活動範囲を線で囲ってください。
- ・よく行った場所に印をつけて、右側の欄にその名前と、よく行った理由や記憶を書いてください。

ワークシートに記載する説明文は最小限にとどめる一方で、自由記述スペースを最大に確保することを心がけ、試作段階で3つだった記入欄を5



図8：市ヶ谷キャンパス・マップ（1973年卒業アルバムより）



図9：市ヶ谷キャンパスの記憶地図ワークシート（表面）



図10：小金井キャンパスの記憶地図ワークシート（表面）

つに増やした。こうして完成したワークシートが図9・図10である。A3サイズの両面印刷とし、裏面には当時の市ヶ谷（または小金井）キャンパスの全景写真を掲載し、氏名と学部の記入欄を設けた。

2024年9月7日のイベント当日は卒業生・後援会連携室の全面協力のもと、「卒業50年記念行事」参加者の189名全員に、市ヶ谷キャンパスと小金井キャンパスの記憶地図ワークシート各1枚と赤色のボールペンを配付した。

ただ、記憶地図ワークシートを配付して、学生時代の記憶を記入してくださいと依頼しても難しいだろう。そのため、「1960年代から70年代の法政大学」と題する講演が、可能な限り記憶の想

起を促す内容となるよう心掛けた。当日スクリーンに表示したスライド資料は本稿の最後に掲載した通りである。

まず、当時の歴代総長（約10年間で6回も交代）と時代背景を紹介し、前出のHOSEIミュージアム映像コンテンツ Vol.5を視聴した。ワークシートの説明に入る前に、大学創立150年史編纂事業を進めていること、これからは学生の歴史にも目を向けたいが、大学側には学生生活に関する資料が少ないので、学生生活について教えてほしいという、今回の趣旨を伝えた。さらに、個人情報とは非公開にしたうえで、ワークシートに記入いただいた情報は法政大学史の資料として研究や展示で利用する旨をあわせて説明した。

続いて、記入例を参照しながら、具体的な記入方法を説明したのち、在学中に解体された六角校舎や1973年竣工の学生会館、キャンパスに張り巡らされた鉄柵の写真、神楽坂や飯田橋方面の喫茶店、映画館、パチンコ屋、書店に加え、市ヶ谷駅方面では大日本印刷や駅の歩道橋、釣り堀など、キャンパス内外のできるだけ多くの写真をスクリーンに映し出して紹介した。小金井キャンパスについても最寄りの東小金井駅前のロータリーや通学路の写真をいくつも紹介した。こうした写真の選出にあたって参考にしたのは卒業アルバムと、そこに掲載された前出のイラストマップである。

以上、現在のキャンパスに「懐かしさ」を抱くことのない卒業生から、どのようにして学生時代の記憶を引き出すことができるのか、その想起の仕組みを工夫し実践した。講演の途中で既にコツコツと記入されている方を見受けたことはもちろん、終盤に会場がざわつき始めたことは卒業生たちが友人と語らいながらワークシートに記入を始めたことを意味し、この試みの達成を実感した(図11)。

（2）記憶地図の分析

本項では、記憶地図に描かれた点や線、記憶されていたエピソード・言葉について分析する。はじめに、個人的な記憶のメモが記憶地図のどの位



図 11：当日の会場の様子（卒業生・後援会連携室提供）

置に描かれたのかを確認する。先ほど紹介した市ケ谷キャンパス近郊、小金井キャンパス近郊の記憶地図を図 12-1, 2 のようにそれぞれ 42 と 36 の区分に分けた。

まず、書き込みがあった地図上の位置について確認する（表 1）。市ケ谷キャンパスでは、D2 (77, 18.6%), C2 (50, 12.08%), D1 (47, 11.35%), D4 (46, 11.11%) への記入が多い。D2 から C2 は、飯田橋駅西口近くの神楽坂の坂下から毘沙門天の坂上までの空間である。また、D1 は飯田橋駅の東口周辺である。さらに D4 は、市ケ谷キャンパスを含んでいるので、ここに思い出の場所があるのは当然の結果とも言える。そして C4, 6 は、キャンパスと市ケ谷駅までを移動する空間である。以上のような書き込みが多い空間は、交通機関の駅とキャンパスの間の移動がほとんどであり、C2 の神楽坂上まで登る点が通学と外れる。

ただし、当時の学生が神楽坂坂上に住んでいる可能性も考えると、徒歩の通学路であった可能性は残る。「下宿先が牛込柳町付近（1~2年）と神楽坂付近（3~4年）にあったため徒歩通学だった」という書き込みもあった。さらに、後述するように喫茶店、麻雀店、居酒屋などを神楽坂で利用していた学生は多い。

一方、比較的記入が多かった E2 については、飯田橋駅を起点として九段下に向かう早稲田通りが学生の記憶に残っていると言えよう。この通り

は、現在もお店はあるが、オフィス街であって学生向けの安いお店も少ない。ところが、50 年前は学生が利用しやすい店が多かったと考えられる。

一方、小金井キャンパスは、E6 (34.1%), E3 (25%), D3 (20.5%) が、特に高い数値であった。E6 は東小金井駅、E3 と D3 は法政大学とその正門周辺である。「当時の小金井キャンパス周辺は畑と住宅のみであり残念ながら右の地図には特に行った場所はありません」という書き込みからわかるように、キャンパス周辺が学生街ではなかったと言える。

続いて第二に、書き込みの内容を場所や事実などで分類した。はじめに確認できたことは、公園など公共空間、喫茶店という場を当時の多くの学生たちが使っていて、それらを想起しているという事実である。キャンパスとは別に、公園や喫茶店をサークルなどがたまり場として利用している。つまり、大学の構内を狭い意味のキャンパスだと考えれば、大学近郊を含めた広い意味のキャンパスが浮かび上がってくる。

例えば、喫茶店については、書き込みが最も多く（45 回、17.7%）、単にお茶や珈琲を飲むだけでなく、サークルやゼミのたまり場として使われていたことがわかる。この時期、法政大学市ケ谷キャンパスは学生数に対して手狭であった上に、学生運動による構内閉鎖があったので、学生たちが校舎を利用できなかった。

喫茶店についての書き込みのいくつかを次にあげた³⁾。現在のようにチェーン店が拡大する前なので、ルノアール以外は個人店である。軽い心、にんじん、長崎、アミティエなどの店名が書き込まれている。個人店だからこそ想起されやすいと考えられる。これらの書き込みからゼミやサークルによって利用する喫茶店が決まっていたことがわかる。なかには授業自体を喫茶店で行ったという書き込みがある。つまり、喫茶店はサークル部屋の代りであったが、同時に教室の代りでもあったと言えよう。

「ここら辺りの喫茶店（名前は忘れた）に入り
ひたった。HESS（法政 ESS）のメンバー 20
人でドッと入った」
「ルノアールは、部室がなかったサークル（マ

ンドリンクラブ）だった為、学生会館で話した
後は、よく話し合いの場として利用していた。」
「喫茶店にんじん。英語研究会執行部が集って
クラブの運営を話し合った。」

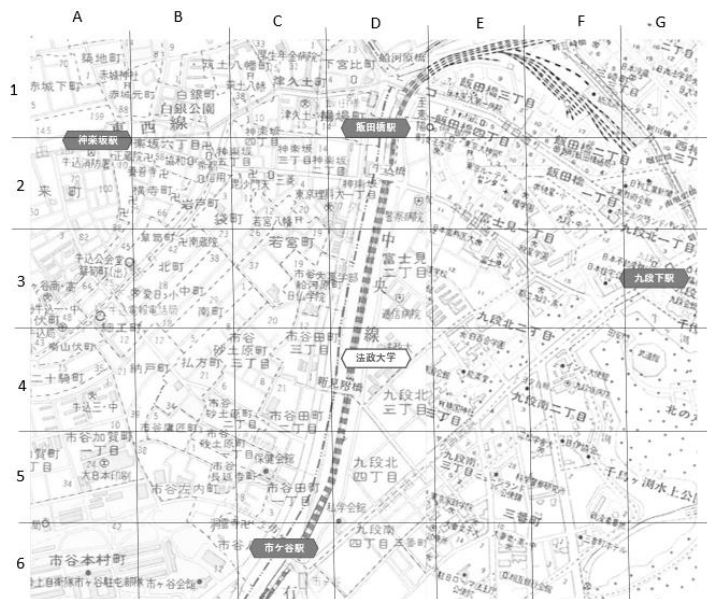


図 12-1 市ヶ谷キャンパス近郊地図の地理区分

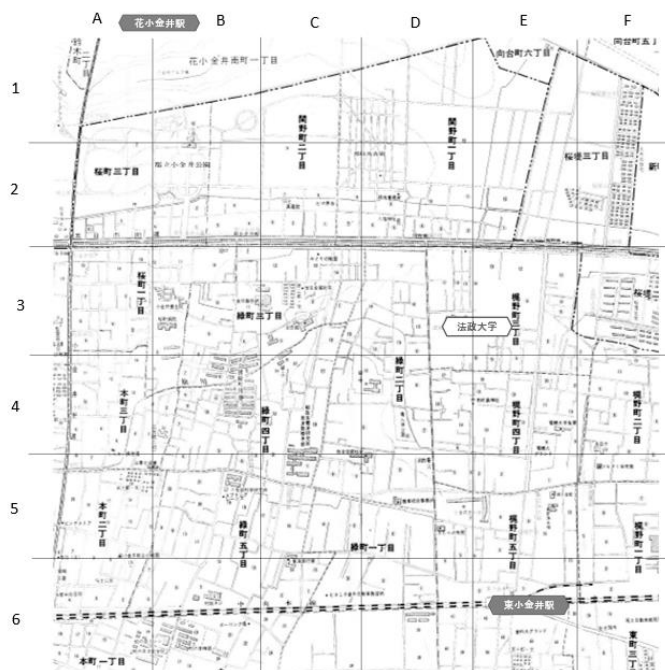


図 12-2 小金井キャンパス近郊地図の地理区分

「喫茶店ピンゼル。クラブの勉強会のたまり場。毎週水曜日はコーヒー半額だったのでクラブの女性先輩によろこばれていた。」

「アミティエという喫茶店で部活の仲間とおしゃべり」

「飯田橋喫茶店「にんじん」は、サークルカメラ部文連の活動でよく使用しました。」

「ルノアール。ゼミ終了後よく立ち寄った」

表1 地図上の位置（市ヶ谷キャンパス）

位置	度数	割合
A5	2	0.48
A6	4	0.97
B2	3	0.72
B4	1	0.24
C0	1	0.24
C2	50	12.08
C4	26	6.28
C5	4	0.97
C6	27	6.52
D1	47	11.35
D2	77	18.60
D3	5	1.21
D4	46	11.11
D5	16	3.86
E1	5	1.21
E2	27	6.52
E3	1	0.24
E4	27	6.52
E5	1	0.24
E6	1	0.24
F4	5	1.21
F5	2	0.48
F6	1	0.24
G3	2	0.48
G4	26	6.28
G5	6	1.45
G6	1	0.24
合計	414	100

「授業の終わった（なかった？引用者）ロックアウトのときはゼミ生と一緒に通った喫茶店」

「喫茶店「ルノアール」ロックアウト時、レポート作成に利用した。」

「第二外国語（フランス語）の授業が喫茶で行われていた。」

表2 地図上の位置（小金井キャンパス）

位置	度数	割合
B2	4	9.1
B6	1	2.3
D3	9	20.5
D4	1	2.3
E3	11	25.0
E4	2	4.5
E5	1	2.3
E6	15	34.1
合計	44	100

表3 記憶のカテゴリー（市ヶ谷キャンパス）

記憶のカテゴリー	度数	割合
アルバイト	6	2.4
イベント	3	1.2
パチンコ	4	1.6
映画	40	15.7
学生運動	10	3.9
喫茶店	45	17.7
居酒屋	26	10.2
古書店	3	1.2
大学校内	23	9.1
三島由紀夫事件	4	1.6
食事	26	10.2
神社・公園	46	18.1
本屋	1	0.4
麻雀	17	6.7
合計	254	100

意外であったのは靖国神社や北の丸公園という公園や神社での体験を思い出す人が多いことである（46回，18.1%）。「靖国神社。北の丸公園。外国人を見つけては英会話を楽しみ学習していた。」「英語のクラブだったのでよく靖国神社へ行って外国人と話をしに行った」という書き込みがあった。現在の学生たちが、靖国神社や北の丸公園に行くという話はあまり聞かない。そもそもコロナ以降、オンライン授業が増えた結果、大学自体に来る学生が減ったと言えよう。

現在、授業は連続させて登録し、空きの時間を作らないようにするという効率重視の選択が行われている。かつての学生たちも、授業を熱心に受講していたとは言えないが、次のような書き込みにもあるように、もっとのんびりしていたようだ。公園なども散歩をする場所として思い出されている。そのような空いた時間が、50年後に生きた経験として想起されていることは興味深い。

「喫茶サヴォイヤ。授業と授業の空き時間に学友と良く行きました。」

「北の丸公園。よく散歩をした場所」

他に書き込みが多いのは、映画（40回，15.7%）、麻雀（17回，6.7%）、居酒屋（26回，10.2%）、食事（26回，10.2%）である。このうち飲食は、現在でも大学生が飲み会などを行っていることを考えると、今と変わらないと言えるが、居酒屋チェーン店が拡大する前なので、「鳥忠」などの個店があがる。

映画は、40回（15.7%）書き込みと多い。この多さについては、名画座の佳作座の影響が大きい。実際の書き込みのうち、33つ（82.5%）が佳作座であり、ギンレイホールが1回、神楽坂の映画館とだけ書かれてあるのが4つであった。安い料金で名画を観ることができ佳作座が法政大学生に映画の教養を与えた影響は大きい。また、麻雀も17回と書き込みが多く、パチンコも4回の書き込みがあった。当時の大学生の遊び文化を知ることができる。

表4 記憶のカテゴリー（小金井キャンパス）

記憶のカテゴリー	度数	割合
アルバイト	1	3.4
大学近郊からの移動	4	13.8
居酒屋	2	6.9
神社・公園	4	13.8
大学校内	3	10.3
授業	2	6.9
食事	3	10.3
麻雀	10	34.5
合計	29	100

上記のような街へと拡大した広義のキャンパスにおける学生文化は、市ケ谷キャンパスの特性と考えられる。ところが、小金井キャンパスという立地になると違いが生まれる。まず、喫茶店について書いている人はいない。また、飲み会なども最寄り駅の東小金井駅から移動していることが多い。例えば、「活動範囲は新宿がメインで大学付近は特に無く東小金井駅との往復のみ」、「飲み会は吉祥寺です」、「下宿は、1~2年国分寺、3~4年は武蔵小金井に住んでいたため東小金井駅と小金井キャンパスと往復しているのみだった。」という書き込みがある。

一方、公園や神社についての書き込みは確認できた（4回，13.8%）。これは、市ケ谷キャンパスとも共通する。小金井公園をあげている人が3名（10.3%）もあり、都心とは異なる自然も多い武蔵野の特徴と言えよう。さらに、共通しているのが麻雀である。10回（34.5%）と最も多い。麻雀が学生の娯楽であり、現在の学生とは大きな違いである。

なお、市ケ谷キャンパスで三島由紀夫の自衛隊での自決事件が多いのは、自決事件が市ケ谷駐屯地で起きたからであろう。このような大きな事件の記憶も土地と結びついていることがわかる。

6 結論

本報告は、卒業から50年目の卒業生の集まりを対象に、法政大学の学生時代の記憶を、キャンパス近郊地図を使って集める実践である。

まず、想起しやすい仕組みを作ることは、このワークショップの目的であった。法政フェアという人が集まりやすい場を利用できるが、同時に時間に制約があった。その時間制約の中で実施したが、回答してくれた人は多かった。様々な歴史資料を紹介し、過去の地図の上に書き込むという手法は、想起の場づくりとして成功したと考えている。

次に、書き込まれた記憶を分析することによって、キャンパスを越えた「学生街」の中の学生生活の記憶を把握することができた。市ヶ谷キャンパスにおいては、映画館、喫茶店、雀荘、神社・公園、居酒屋という場が記憶に残っており、それらが学生文化を担う場であったことがわかる。また、現在のキャンパス近郊は学生街というイメージはないのだが、50年前にはお金がない学生たちが気軽に立ち寄れる場があったことを卒業生たちの記憶の中から知ることができた。

一方、小金井キャンパスにおいてはキャンパス近郊に学生たちが立ち寄れる場が少ないことが確認された。つまり、学生たちにとってはキャンパス近郊ではない交通機関を使って移動していた。

以上が地図を使った学生時代の記憶を使った収集結果である。今回は、50年目の卒業式というイベントで行われたので、同じ年の卒業年度であるが、継続的に実施していけば、学生文化の変容を把握することができるであろう。また、他大学で同じような実践をすれば、大学間・キャンパス間の比較をすることができる。より効果的な手法を試行錯誤しつつ、分析の範囲を広げることは今後の課題である。

注

- 1) 記憶についての先行研究の整理は、梅崎・岩井(2020)を参照している。

- 2) 企画展示の内容は、HOSEI ミュージアム(2025)で詳しく報告している。
- 3) 文意がうまく取れない書き込みについては一部編集している。

参考文献または引用文献

- 石川恵架(2023)「1980年代を知る人々からみた神田学生街の変容」『法政地理』第55巻、2023年3月、pp.29-43.
- 梅岡恒治(2008)「大学キャンパスが周辺地域に及ぼす影響—東京を事例として—」東京大学大学院新領域創成科学研究科 環境学研究系 社会文化環境学専攻、2008年3月学位論文、<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/1171> (参照2025-2-19).
- 梅崎修・岩井桃子(2020)「記憶の社会的チカラ：釜石におけるアートと展示イベントの報告」『生涯学習とキャリアデザイン』第18号(1) pp.197-214.
- 大野雅子(2018)「ノスタルジアの喫茶店—ガロの「学生街の喫茶店」にみる青春小説の反復」『帝京大学 学修・研究支援センター論集』Vol.9、2018年3月、pp.45-61.
- 柿嶋宏治・福井恒明(2014)「学生街における学生の日常活動の空間分布と要素集積」『景観・デザイン研究講演集』No.10、2014年12月、pp.83-87.
- 木方十根(2010)『「大学町」出現—近代都市計画の錬金術』河出書房新社
- サトウアヤコ(2020)『日常記憶地図 深川・清澄白河編 1960-2019』ほか
- 佐藤能丸(2003)『大学文化史—理念・学生・街』芙蓉書房出版
- 瀬戸口龍一(2024)「法律学校研究会の活動と専修大学の試み(特集:シンポジウム 神田「学生街」と大学史)」『大学史研究』第33号、2024年12月
- 谷本芳郎(1983)「神田学生街の発生と変遷について」『法政』1983年5月、pp.3-47
- 出口競(1917)『学者町学生町』実業之日本社
- 法政大学戦後五〇年史編纂委員会編(2004)『法政大学と戦後五〇年』法政大学
- HOSEI ミュージアム(2025)『HOSEI ミュージアム紀要』

第5号

松原太郎 (2016) 「明治期神田学生街の形成と私立法律学校」『明治大学史資料センター報告』第37集 pp. 99-117.

Dolores Hayden, 1997, *The Power of Place: Urban Landscapes as Public History*, The MIT Press. (=2002, 後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎 共訳『場所の力』学芸出版社).

Halbwachs, Maurice, 1950, *La memoire collective*, Press Universitaires de France. (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社).

Nora, P., 1996, *From Lieux de memoire to Realms of Memory*, *Realms of Memory: Rethinking the French Past*, vol.1, Columbia University Press. (=2002, 『記憶の場』から『記憶の領域』へ 谷川稔監訳『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史』(1), 岩波書店).

ワークショップ当日使用したスライド資料

於 法政フェア2024

2024年9月7日（土）

1960年代～70年代の

法政大学

HOSEIミュージアム任期付専任所員・准教授

北口 由望



中村哲総長の誕生

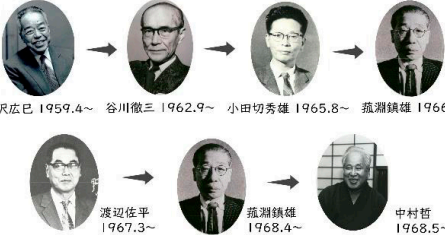
1968年～1983年という戦後最長の15年間

総長就任に際して
「今日の大学の危機は、世界的に連鎖反応を起こしている学生運動のためではなく、かえって、大学の大衆社会状況と、それに対する根本的対策を欠くことに原因があるのであって、大学の制度や組織についての分析と調査の上で、根本的改造と反省が必要となっている」
（『法政大学広報』第129号）



中村哲

1960年代の歴代総長（総長代行を含む）



有沢広巳 1959.4～ 谷川徹三 1962.9～ 小田切秀雄 1965.8～ 森淵鎮雄 1966.5～
渡辺佐平 1967.3～ 森淵鎮雄 1968.4～ 中村哲 1968.5～

関連動画

HOSEIミュージアム 映像シリーズ
「法政大学の歴史・個性・文化」より
Vol.5 大学への「問い」／学生との「対話」—中村哲総長と法政大学の15年—



抱える諸問題

60年安保反対運動
・教職員と学生が全学統一集会を開催
・70年安保へ
「マス・プロ授業」「大学大衆化」
・1951年に約8千人の学生数が1962年に約3万人に増加
・55・58年館、62年館、小金井校地を開発するも追い付かない
→大学紛争の時代へ



キャンパスとその周辺の記憶

どんなに校舎が新しくなっても、どんなに街が新しくなっても、
学生たちの記憶に残っている

「キャンパス」という共通の場
1973年度卒業という共通の時代

学生の数だけ、キャンパスとその周辺の記憶がある

1968年という年

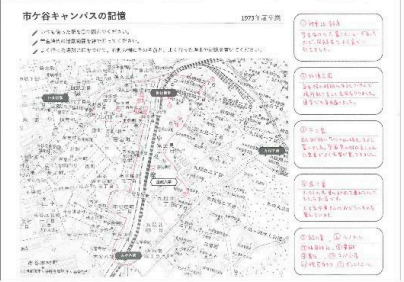
世界的な動き
・ベトナム反戦運動の世界的展開
・アメリカ公民権運動
・「ブラハの春」
・フランス五月革命をはじめとする学生運動
国内の動き
・反戦運動（佐世保エンタープライズ反対、沖縄問題）
・公害反対運動（イタイタイ病、カネミ油）
・東京大学および日本大学の紛争

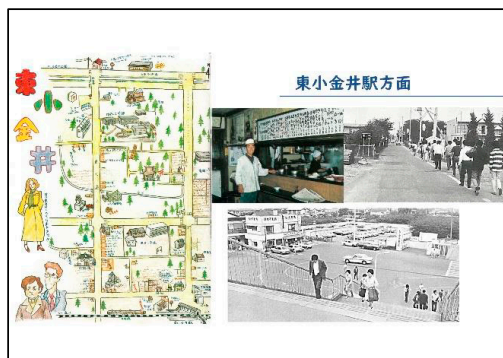
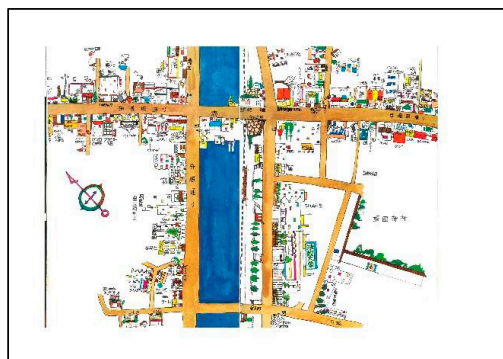


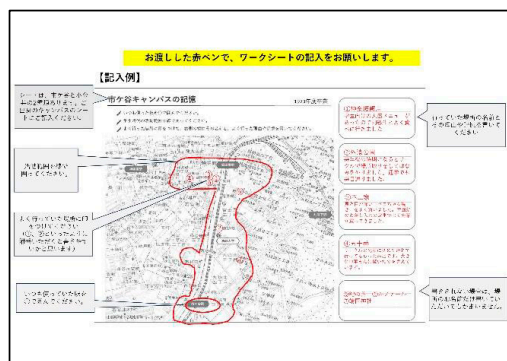
国立歴史民俗博物館企画展示のフライヤー（2017年）

市ヶ谷キャンパスの記憶

1973年正午頃







*最後の1枚は、卒業生・後援会連携室提供